

ある群像



タイ国ピッサヌローク県・バンクラーン村でのワークキャンプ(トイレ改修)

2025年12月号

公益社団法人 好善社

東京都目黒区中町1-7-4

〒153-0065

電話:03-3712-3845

Fax:03-3791-1150

2025年11月25日

発行 加藤裕司

編集 岡本緒里

ニュー好善社

この『ある群像』をご覧のみなさんは、「好善社は少し変わってきたな」とお感じになっているのではないのでしょうか。

昨年度から、前任者から21歳年下の社員が代表理事となりました。これまで長く中心的役割を担ってきた社員の死去などもあり、一世代下の社員によって事業が担われるようになり、そこに自ずと変化が表われ始めました。

目に見える部分においては、国内では入所者が少なくなった療養所の訪問に努め、特に所内教会のみなさんとの関わりが絶えないようにと意が用いられています。

海外事業に関しては、長年タイを中心にしてきた事業が、タイの姉妹団体と共に隣国ラオスにまで展開されるようになり、医療のみでなく高校の校舎建築の支援など、現地の評価を得ています。

そうした事業の実施、展開の中に若返った世代の感性、やり方が生き生きと発揮され始めています。

監事・棟居 勇

健康長寿・北野貞晴さん

102歳からの社会復帰 ①

好善社理事 乗圭子

間もなく102歳のお誕生日を迎える北野貞晴さんが、今年11月に栗生楽泉園から故郷の大阪に社会復帰されました。夏に長年住み慣れた栗生楽泉園を離れるという決意をお聞きした時、「101歳を超えて一人暮らしを始めるとは、何と無茶なことを!？」と心配が先行して信じがたい気持ちで驚くばかりでした。しかし、決意は固く「残りの人生を生まれ故郷の大阪で過ごしたい!!」との力強い言葉を直接お聞きした時、北野さんの新たな門出を心から応援したいと思いました。

出会は栗生楽泉園でのワークキャンプ

北野貞晴さんと好善社との繋がりは1980年代に栗生楽泉園で好善社主催のワークキャンプが盛んに実施された頃、当時の好善社理事長であった故・藤原倅作さんが現・代表理事である加



101歳のお誕生日

藤裕司さんの母上に北野さんを紹介したことに廻ります。その後、加藤さんが母上に勧められてワーク

キャンプに参加して北野さんとの交流が始まります。私も草津でのワークキャンプ参加中に北野さんと出会いました。同じ大阪出身ということで意気投合し草津訪問の度にお訪ねし、北野さんの大阪への里帰りの際にはお墓参りに同行させていただき、大阪の我が家にも立ち寄っていただきました。30数年前、私の長女と加藤裕司さんの東京での結婚式にも列席。当時は親戚の結婚式に招かれることもなく生まれて初めて結婚式に招待されたと喜んでくださいました。私の家族が関東に転居してからは、大阪への里帰りの際は大阪在住の藤田裕香子社員一家と交流を深める機会に恵まれ、我が家と同様に藤田社員の長女の結婚式に招待されました。

健康長寿の秘訣

若い頃、園から草津市街地(約3キロ)までを徒歩で往復したことも足腰を鍛えたようです。ゲートボールでも活躍されていました。80歳になってからの四国88カ所のお遍路参りもその後の心身の健康維持につながったのではないかと思います。90歳から通信講座で始めたハーモニカのレパートリーは100曲以上。カラオケに大正琴、たくさんの趣味を継続できる集中力と何にも前向きな姿勢にはお会



右から、乗夫妻、北野さん、加藤夫妻

いする度に励まされます。食事は手作りで、特に焼き肉や焼ききなどの肉料理が好物。常にお部屋は整理整頓され、今でも年賀状は北野さんの自筆で届きます。身の回りのことから何でも自分でする長年の習慣が北野さんの健康を支える力となっていると思います。北野さんを慕う若い人たちや幼い子どもたちに囲まれる機会が多いことも若さの秘訣と考えられます。

87年間の療養所生活に別れを告げて社会復帰への道を選ばれた、勇氣ある決断に敬意を表すと共に北野さんとの出会いは私たちにとって誇りであり希望です。期待と喜びの中で新たな生活が始まりました。受け皿になってくださった「ハルセン病支援センター」の方々の手厚いご支援と肉親の理解、大阪在住の心強い友人や知人に見守られて新たな出会いと希望の中で今後の生活が健全、安心で幸せな日々であることを祈るばかりです。

ハンセン病療養所との出会い ③

楓公園のベンチで 語られた人生

松丘保養園での出会い

好善社社員 山本公子

3年前、菅生周二社員の松丘保養園聖生会会堂での礼拝の呼びかけがあり、長く閉ざされていた会堂が開かれ、聖生会を担ってこられた神子澤悦子さんと共に礼拝に与ることが許された。

松丘保養園を初めて訪れたのは1964年、同園での初回ワークキャンプの時だった。数カ月前の春に挙行された長島聖書学舎（岡山県）の卒業式で、神子澤新八郎さんと悦子夫人に初めて出会った。松丘保養園でのワークキャンプは卒業後帰園されていた夫妻の協力のもとに行われ、以来ご夫妻とは長いお交わりをいただてきた。



楓公園（右側にベンチが写っている）。
出会いの数年後に末永さんがわざわざ撮影をして送ってくださった。

末永フジイさんとの出会い

その初回ワークキャンプ参加の時、末永フジイ（ペンネーム・松永）さんという婦人に、園内の楓公園のベンチに同伴された。楓の葉の揺らぐ下のベンチに座り、私自身の心の内部の満たされない思いと将来を決する決断の前の躊躇など、ワーク参加への思いを語った。そこで、彼女が自らの人生を、そのたまたまのままで静かに語ってくれた。祖母のハンセン病発病により一家離散、病を持つ祖母に預けられたこと、やがて復縁かなった両親のもとに戻った安堵の日々はわずかで、小学校5年の時、自身の発病がわかった。以来、彼女はただ親兄弟を苦しめるわが身の消滅のみを願ったという。16歳でこの保養園にたどり着き、生き場所を得た安堵とともに、家族とは絶縁、片足義足、余病の中で信仰と短歌によって支えられ生きてきたと語られた。近年、失明し白杖となったが、手術の結果奇的に、弱視ながら見えるようになって、この楓の葉に光が差した美しさがどれほどかと語られた。

彼女の過酷な半生の告白に私は言葉を失い、魂の深部を揺り動かされる感銘を受けた。病みつづ、身を隠すかの如くひっそりと暮らし続ける彼女から発せられる人間の尊厳というものがあると知らされた。以来私は、そこに行けば真実なものに触れられる、美しい人に出会えるとはばかり療養所に足を運ぶようになってきた。子どもたちが小学生になつてからは毎夏、孫を連れての里帰りのように保

養園に出かけた。その都度、娘と孫をもてなすように栗入り赤飯と山のように盛られたトウモロコシで迎えられる。

私たちが隔離差別に目をつぶり、片隅に追いやつたのという自責の念、恥じつつも、当時は、その背景に迫る社会的な視座を持ち得ていなかった。不幸と苦悩の極みのなかで、その魂が持ち得た優しさに甘え続けたお交わりだった。1999年、最後の病床に子どもたちと駆けつけた。指が欠け萎えた両手で私の手を持ち上げ、自分の頬を触れさせた感触を思いだす。召されて26年。再び毎年保養園を訪れることができるようになったこの3年、しきりに末永さんを思い起こしている。

晩年、長年の短歌が纏められ、歌集が上梓された。数奇な苦難の人生と、多くの出会いを詠まれた中には、幾首もの私や子どもたちのことを詠んでくれた歌がある。私の人生の軌跡をも辿れるごとくである。



前列：末永さん、夫の滝沢さん。
後列：筆者、筆者の二男と夫

ハンセン病の 歴史を学び、 共に働いた3日間

好善社理事 渡辺圭一郎

第19回タイ国青少年ワーク キャンプ報告

好善社主催、第19回タイ国青少年ワークキャンプが8月7日(木)から14日(木)にかけて行われました。主題は「友を思い合う」

英語「Friendship」

場所はピッサヌローク県のバンクラーン村です。参加者は日本からは高校生から社会人を含む8名のキャンパーと、好善社に関わるスタッフ8名が参加しました。タイ国のチャンタミット社から37名、オーストラリアから7名の参加がありました。事前準備



をオンラインで2回(7月19日と22日)に分けて行い、今年初めての試みとして関東(品川)に全員集合し、国立ハンセン病資料館訪問、多磨全生園内の秋津教会での礼拝と交流からキャンプを開始いたしました。

バンクラーン村でのワーク

今回のワークキャンプの内容はトイレ家屋の取り壊しと再建、トイレ設備の修繕、トイレ周辺の家屋の床のコンクリート張りとそのためのバケツリレー(土、石、セメント)などでした。また現地の子どもたちの礼拝とその後の活動に参加するプログラムもありました。ワークではタイ、オーストラリア、日本のそれぞれが入り乱れながらでしたが、時折笑い声や歓声が起こる場面もあり、「Friendship」という主題の通りの内容でした。キャンプ最終の夜には、チャンタミット社の心遣いもあり、キャンプファイヤーと出し物・交流の企画もあり、皆にとり楽しい思い出となったのではないかと思います。

ワークキャンプ前の訪問

また今回の7日間の旅では、ワークの3日間の他に、ハンセン病や回復者のこと、それぞれの国のハンセン病の歴史について学ぶ機会を持ちました。初日の7日(木)は日本の国立療養所多磨全生園(東京都東村山市)を訪問し、園内の秋津教会で開会礼拝(前代表理事三吉信彦牧師司式)を行い、入所者の方とも時間・空間を共にできたこと



ワークキャンプ参加者 集合写真

は本当にありがたいことでした。また過去のキャンパーや、好善社の社員も何名か来てくださり、交流する機会も持ちました。

タイ国に到着後はまず、バンコクの近くにあるプラブラデーン伝道所と回復者の方々を訪問し、現在の回復者の方々の暮らしの実際と生活環境を肌で感じてもらいました。キャンパーたちはハンセン病を患った方々が今なお背負わされている苦悩と他の街との違いを感じたことでしょう。

回復者・病院・学校の訪問

ワークキャンプ後は、タイ国北部のメータ村(ランパン県のハンセン病回復者村)を訪問し、回復者の方々の生活や、後遺症を抱えながら生きる生活

の実態を見せていただきました。また13日（水）にはチェンマイのマッケーシニアセンターを訪問し、その後、好善社スタッフの田中孝明さんが勤めておられるチェンマイ・クリスチャン学校を訪問しました。学校を挙げての温かい歓迎を受けつつ、ワークキャンプの参加者とクリスチャン学校との新たな出会いが与えられたことも感謝でした。

最後に

例年とは異なるプログラムにもチャレンジした第19回ワークキャンプ。代表理事の加藤さんはじめ、理事・監事の皆さまの協力があつて実現したキャンプでした。また現地でもスタッフはじめ、キャンパーの皆さまの協力によって無事に終えることができました。送り出してくださったご家族の皆さま

も含め、感謝申し上げます。最後に好善社の活動を覚え、寄付も含めお支えくださっている皆さまに心よりお礼申し上げます。今回もこのようにキャンプに参加した者たちが、国内外でハンセン病の歴史について学び、現在に続く課題を知り、国を越えて心通い合う貴重な経験を持つことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

療養所教会のいま

話し合いを重ね、 月2回の礼拝に

多磨全生園 秋津教会

好善社理事 二吉信彦

多磨全生園の秋津教会は、昨年12月末をもって、主日礼拝を閉じました。教会員の高齢化で出席者が減少してきたこと、そして何よりも教会の運営責任を担う教会代表のなり手がいないというのがその理由でした。

昨年、ハンセン病療養所教会の中止・閉鎖が報じられる中でも、なんとか主日礼拝を維持してきた秋津教会の閉鎖は、創立当初から責任を負ってきた好善社にとって本当に残念なことでした。礼拝がなくなることの寂しさ、悔しい想いは、最後まで礼拝出席を続けてこられた教会員の皆さんの内にも当然あ

り、それは説教を担ってきた牧師方にとっても同じでした。

1月以降、何とか良い方向性はないかと、牧師と教会員の間で話し合いを重ねました。そして園・自治会の担当者の方とも折衝を続けた結果、毎月第1と第3主日に、礼拝堂において主日礼拝をもつことで合意できたのです。礼拝の運営は教会員と好善社が共に担

（秋津教会主日礼拝責任者）

りました。この間の協議で園側の好意的な対応に深い感謝を覚えるものです。新年度の4月から順調に礼拝は守られています。秋津教会の会員数は現在12名、そのうち礼拝に出席可能な方は6〜7名です。毎回4、5名の方が不自由な体をおして出席してこられる姿にいつも感動を覚えています。説教者と奏楽者に加え、外部の関係の方々4〜5名が応援に駆けつけてくださって、毎回10名余りの礼拝を続けています。

また、6月から9月の間に、秋津教会を会場に外部の教会・関係団体の講演会が3回も開催されました。それぞ



秋津教会での礼拝風景

川崎正明さんを悼む

好善社監事 棟居 勇



追悼／ステッキな人生

好善社理事 乗 圭子

一昨年12月に社員長尾文雄さんが亡くなり、昨年6月発行の本誌にその追悼文を川崎正明理事が記しました。その川崎さんが本年9月3日忽然と死去されました(享年88歳)。当社の広報面で大きな役割を担ってきた長尾さんの後を引き継いだ川崎さんを失ったことは、私たちにとって深い悲しみです。

川崎さんご自身からの発病の報告は今年3月上旬のことでした。病名は肝臓がんです。余命幾ばくもないような報告に私たちはひどく心を痛めたものでしたが、実際は約半年の闘病となりました。その間、長尾さんの後を受けた広報誌『ある群像』の編集・発行、続く講演会(関西)の準備と、根を詰めた、精力的な働き



毎月第3日曜は、川崎理事が秋津教会の礼拝を担当。礼拝後には、会員と歓談。

を続けられました。最後は、体力を落とされ、8月下旬三吉信彦理事と共に大阪の自宅を訪れた時には、かなりの病状の進行がうかがわれましたが、話を始めると、そこにはいつもと変わらないう川崎さんがいました。葬儀には伺えなかった私にとつて、それが川崎さんとの地上での最後のお別れとなりました。

川崎さんが好善社社員になったのは、1985年で、61年に社員になった私と比較ればかなりあとになります。川崎さんの、私を含め他の社員にない業績は、社員になって比較的すぐに、勤めていた学校の国内留学の形で全国13国立療養所すべてを訪問し、その「報告」を残したこと、好善社ホームページに「ハンセン病の歴史」というかなり詳細、長文の文章を残していることでしょう。

さらに、私たちの療養所訪問は、所内キリスト教会の人々との関わりが主なのですが、川崎さんは、その文学的感性から、キリスト者でない多くの人々とも関係をつくり、各園自治会が発行している機関誌に定期的に文章を寄せるなど幅の広いものでした。また、親しくなった入所者とカラオケを楽しむなど、多くの友人をつくっていました。

多彩な関わりの跡を残した川崎さんの活躍は語りつくせません。遺されたご家族に心から慰めを祈るものです。

川崎正明理事が好善社主催の社会人ワークキャンプ(東北新生園)に参加したのは関西学院中学部宗教主事として在職中のことでした。その後、全国13カ所の療養所を足繫く巡り、多くの入所者の方々との交流を喜びとされていきました。特に大島青松園での詩人塔和子さんとの出会いは、その後の人生を変えさせるほどの影響を与えるものでした。ご自身の著書『いい人生、いい出会い』『ステッキな人生』『かわらなければ路傍の人』『人生の並木道』そのほか療養所内の機関誌にも寄稿し、『塔和子の世界』を広く紹介しておられます。

度重なる骨折で肩や足の数カ所に埋められた金属にもめげずに、自らを「筋金入りの男」と駄洒落を飛ばし、愛用の杖(ステッキ)に歩行を支えられながら各地の療養所へと足を運んでおられる姿が印象的でした。「転んでもただでは起きない力」を持ち備えた人でした。反面、淋しがり屋で自己愛の強い分、隣人への思い入れや情の深さが多くの人々の心を魅了し、愛される人でした。

死の宣告を受けた後も、持ち前の「好奇心、想像力、表現力」を大切に、最期まで希望を持ち、生き抜いた川崎先生の「ステッキな人生」を忘れません。

川崎先生「アリガトウ、そしてサヨウナラ」

好善社短信

◆ 第19回タイ国青少年ワークキャンプ
8月7日～14日(本誌4頁参照)

◆ ワークキャンププリユニオン(国内)

11月23日～25日 栗生楽泉園(群馬県)にて。タイから6名が参加。

◆ ハンセン病を正しく理解する講演会
関東・6月28日新栄教会にて

講師・丹羽弘子さん
関西・7月5日 西宮中央教会にて
講師・三木賢治さん

◆ その他講演会

6月22日 ハンセン病学習会多磨全生園にて 講師・三吉信彦理事

6月25日 横浜共立学園にて
講師・渡辺圭一郎理事

9月2日 千葉支区部落差別問題特別委員会・多磨全生園
講師・三吉信彦理事

◆ 療養所教会礼拝説教

教職(牧師)三吉信彦理事、棟居勇監事および元キャンパーの小林眞さんが、毎月第1・3日曜日に多磨全生園秋津教会礼拝説教を担当。

松丘保養園松丘聖生会礼拝(第3日曜)に、毎月菅生周一社員が出席。

◆ 女子学院バザーに参加

11月1日、タイ国の民芸品、国内療養所入所者製作の陶磁器作品を出品。

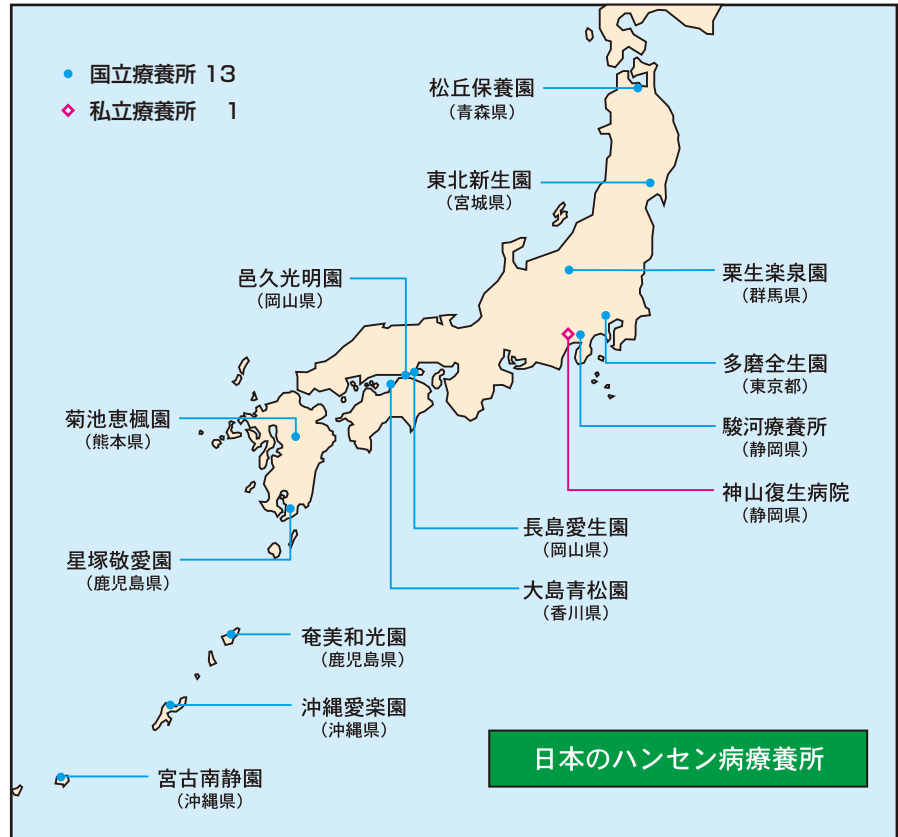
◆ 訃報

8月23日 椿憲二郎牧師逝去(享年88歳)。椿牧師は長年秋津教会での礼拝奉仕にご協力くださいました。8月29日武蔵野教会にて葬儀。

9月3日 川崎正明理事逝去(6頁)

国立療養所 入所者数
2025年5月1日現在

	男	女	計
松丘保養園	15	23	38
東北新生園	6	17	23
栗生楽泉園	16	14	30
多磨全生園	35	50	85
駿河療養所	15	17	32
長島愛生園	36	34	70
邑久光明園	22	26	48
大島青松園	17	12	29
菊池恵楓園	41	73	114
星塚敬愛園	22	30	52
奄美和光園	2	7	9
沖縄愛楽園	35	41	76
宮古南静園	17	16	33
25年5月計	279	360	639
24年12月計	293	374	667
前回比	-14	-14	-28



日本のハンセン病療養所

厚生労働省調べ 現在平均年齢88.8歳

12月・クリスマス募金のお願い
国内とタイとラオスのハンセン病に関わる好善社を支えてください!

2025年度募金(会費・寄付)目標額 1,100万円

好善社の広報啓発活動での講演会について

公益社団法人好善社の事業の柱のひとつに、広報啓発活動(『ある群像』発行、ハンセン病についての講演活動)があります。毎年開催している「ハンセン病を正しく理解する講演会」は、療養所の入所者の方や、ハンセン病と深く関わってきた方々を講師に迎えての講演です。これとは別に、社員が教会やキリスト教学校などに出向いて、療養所との関わりや歴史や今の活動の様子など、小規模ながら講演会を毎年数カ所で行っております。国内療養所の終焉が近づいている今だからこそ、ハンセン病や療養所についての研修会や講演会の企画を考えている方がいらっしゃいましたら、是非当社にご連絡いただければと思います。微力ではありますが、設立から140年以上の月日をハンセン病と共に歩んできた中で、少しでも届けられる声があるかと思っております。お気軽にご相談を頂ければと考えております。

代表理事 加藤裕司

好善社国内ハンセン病啓発・支援事業

- ◆全国13カ所の療養所訪問・交流。
- ◆偏見差別解消のための講演会・出版・啓発活動。
- ◆回復者・入所者の尊厳保障、名誉回復支援と啓発。

2025年度収支予算(抜粋・単位円)

収入	会費	3,000,000
	寄付	8,000,000
	基金からの振替他	12,000,000
	計	23,000,000
支出		
	療養所訪問・教会援助金	1,300,000
	広報啓発活動費	2,900,000
	タイ・ラオス支援費	11,400,000
	事業管理費	7,400,000
	計	23,000,000

タイとラオスのハンセン病回復者支援事業
1,140万円の活動費が必要です



ラオス南部での研修会初日に集合写真

好善社は、1982年からタイ国に関わり、同国のハンセン病支援団体チャントミット社への側面的支援を継続しています。同社の主な活動は、高齢化した回復者の訪問・交流と高齢者デイサービスなどがあり、私は月1回デイサービス2カ所を訪ね協力。他に、元回復者村に住む青少年が他者と協力して自らのコミュニティを築くための支援プログラム、ワークキャンプに力を入れています(4頁)。

また2016年以降、隣国ラオスのハンセン病回復者村の訪問を重ね、NDC(ラオスハンセン病対策センター)の要望で6月に地元職員へのフットケア研修2日間実施。タイの理学療法士ソムキエさんのご尽力により、ウボン県に接する回復者村のヘルスセンターを会場に、その看護師7名を対象に、手足に後遺症のある46(のべ57)人が協力してくれました。着用超過で擦り減った履物を各自の足の状態に合わせた保護靴に替えた回復者は喜びました。社員 阿部春代

公益社団法人 好善社 2025年11月25日
 代表理事/加藤裕司
 理事/三吉信彦 阿部春代 乗圭子 岡田祐之
 藤原真実 渡辺圭一郎 監事/棟居 勇